

あ と が き

東南アジア研究第二号をお送りする。秋灯下御一読をお願いできれば幸である。第二号の編集にあたって最も御迷惑をかけたのは原稿〆切日についてである。実は第一号のあとがきに〆切を10月末日の予定と記しておいた。当時この雑誌は年二回刊行の手筈であったが、年二回では連絡にも不便であるので、少し回数を増すのがよいという意見が出、その為に一カ月原稿〆切を繰上げたのである。特に藤原利一郎、西田龍雄両氏に対しておわびを申し上げねばならない。

第一号出版後僅か三カ月であるが、その間発展途上にある東南アジア研究センターではいろいろ喜ばしい出来事が継起した。一は平沢興総長が岩村忍教授を伴って7月28日から8月9日までビルマ、タイ、マラヤを訪問され、調査研究の為の道をつけて頂いたことである。その旅行の御感想が寄稿として本号にのっているが、元来は8月21日に講演をして頂いたものに多少の御加筆を願ったものである。二は日比野丈夫氏が特にシンガポールに華僑研究に出かけたことである。シンガポールの最近の情勢から見ると、この調査旅行は貴重なことになるかも知れない。三は本岡武氏が9月26日羽田をたってマニラ経由バンコック、ラングーン方面にセンターの要務と調査に出かけられ、渡部、佐藤の両氏が本岡氏と合流のため10月3日羽田をたれたことである。

その他まず飯島茂君が9月16日京大助手に任命され、東南アジア研究センターの業務に専念して頂くことになったことを特記せねばならない。同君は京大農学部農経の博士課程を終え、印度に留学し、ネパール方面の調査にも従事し、アジア経済研究所に入って、更にワシントン大、カリフォルニア大（パークレー）に留学し、最近帰朝されたばかりであるが、アジア経済研究所に了解を得て来て頂いたものである。業務多忙でお気の毒に思うが、センター事務の責任者を得たことを我々としては大変喜ばしく思っている。

更に喜ばしいのは東南アジア研究に専念せんとする十数名の大学院学生諸君と少壮の東南アジア研究者が毎週定期的に会合を開き、研鑽する会合を持たれるに至ったことであって、その成果は期して待つべきものがある。なお本センター企画当初からの参加者である水野浩一君が二年間のコーネル大学留学を終って10月に帰朝せられる。今後の御活動を期待している。

現地語学習の為にビルマ語、マライ語の学習会が持たれているし、法学部関係の分科会も開かれている。東南アジアからの留学生諸君との間にも道が開かれつつある。事務のほうではおてつだい頂いていた若村芳子さんがおめでたの為に休暇をとられ、橋田君子さんに御代行願っている。

編集のために矢野暢、前田成文両君など大学院生諸君の労を煩わしたことにお礼を申し上げねばならない。このように、東南アジア研究センターが活潑に動いていることを記して編集後記に代える。（編集委員）